

## 院政期歌学知の動態的遷移の研究

### ——六条藤家歌学書の生成と伝流——

梅田 径

#### 一 はじめに

文学は行為の集積である。古典文学はそうした行為の歴史的な堆積として、書物と、作品を取り巻く種々の文化環境と、言説空間によって構築される。それらの歴史的な推移のあり方は何に反映されているのだろうか。人々の書き留める記録の中か、それとも図書館の収蔵庫に眠る本か。しかし、こうも言えるだろう。「書物の歴史は書物自身に宿る」と。

院政期という和歌・歌論歌学にとって特別な時期の作品群を基盤として、書物の歴史的堆積のあり方を、書写面の変容という観点から考察する。従来の文献学的手法と新しい方法によってこうした変容の様相を明確にしようというのが本博士論文の目論見である。ごく単純な言い方をすれば、写本における書写面が諸本間でどのように変化していくのかを探ることを目的としている、と要約できる。しかし、書写面がどのような要素で変化していくのかを解き明かすことは容易ではない。書写者たちの書写態度だけではなく、著者の与えた書物の性質もまたこれに大きな影響を与える。すなわち作品成立当時の同時代的な環境や作者の構想と、作品が伝流する歴史的な時間経過における変容の両方の影響を考える必要がある。これが本博士論文の結論である。

主に取り上げたのは院政期中後期に俊成・定家らと並び称された歌道家、六条藤家の藤原清輔（一一〇四く一一六四）の著述である。清輔には、『袋草紙』や『奥義抄』、『和歌一字抄』、『和歌初学抄』といった歌学書、そして『清輔集』、『統詞花集』といった歌集に至るまで多数の著述が現存する。その他に散逸した書物も多いが、中でも『奥義抄』や『和歌初学抄』は複数の系統諸本が確認され、それぞれの本が大きく異なる書写面を持っている。しかしそれらの変容は無作為なものではない。あえてそこに作為をみいだすとすれば、そこには一書の構造を、享受者である書写者が最適化しようとしている動的な意思を読み取ることができる。それらの意思は一個人のもつような意識とは違ったものである。集合的であり、分散的であり、それぞれが個別に異なる変化を遂げながらも、現存する伝本を見渡してみると、そこにはある程度の流れのようなものがみえてくる。そのような書写面のあり方は、従来の書誌文献学では個別的な事例として処理されてきたが、こうした変化のあり方をみることで逆に清輔が付託しようとした書物のあり方が、その変化の変数的な性質としてみいだすことができるのである。歴史的な変化を動態として捉え、その動きの痕跡を書写面にみいだすこと。このような方法論はまだ未熟な部分を残さざるを得ないが、静的で動かないものとしてみられてきた書物のあり方を知る上で他の手法では見落としてしまう性質に光をあてることができる。「動態的遷移」という聞きなれない言葉を博士論文の主題においたのには上記のような理由がある。

#### 二 全体の概要

本博士論文は全五部、計十四本の論考を再構成したものである。「第一部 動態としての諸本論」には、「第一章 通読する歌学書、検索する歌学書」「第二章 大東急記念文庫本『奥義抄』の情報構造 —— 歌学書の割付を中心に ——」「第三章 『奥義抄』の書写形態 —— 散文的項目を中心に ——」「第四章 『和歌初学抄』の書面遷移 —— 項目配置と享受 ——」の四本の論文を入れた。これらは先に述べた諸本論の動態的な様相を明らかにする目的で書かれた。第一章では幅広く種々の歌学書を取り上げて、それらの変容が末流伝本に至ってもより高度な合理的な書写面が追求されてきたことを明らかにした。第二章では、大東急記念文庫本『奥義抄』を素材として、一書の中で書写面がどのような意識で整理されているのかに追った。第三章では『奥義抄』諸本を取り上げて、書写面などのような要因によって変化を被るのかを追求した。第四章では、『和歌初学抄』をとりあげ、第三章の方法論を用いて、写本の本文系統をまたいで同一の書写面の変化が起こることを明らかにした。

「第二部 院政期における歌学の展開」には、「第一章 『和歌初学抄』の構想 —— 修辞項目を中心に ——」「第二章 歌学としての誹諧歌」「第三章 藤原清輔著述の作者名表記 —— 無名と読人しらずの使い分けを中心に ——」「第四章 『和歌一字抄』の注記をめぐって —— 内閣文庫本を中心に ——」の四本の、院政期歌学に関する論文を収めた。第一章では諸本研究の段階に留まっていた『和歌初学抄』を再検討し、枕詞や縁語、掛詞等に関わる記述に「そふ」「よせる」「つづく」といった表現が使われており、本書全体が詞続きに関わる語句を取り上げたものであることを指摘し、院政期の和歌教育において従来にないコンセプトで作られていることを明らかにした。第二章では、誹諧歌の歴史的な変容を辿った。中世には誹諧歌を分類する説が多数あり、誹諧歌について論じることが逆に誹諧歌の理解を困難にしていく様相を辿った。第三章では清輔の著作にみえる作者名表記が著述ごとに調整されており、中でも「読人しらず」という詞は当時の和歌故実の蓄積によって何かの事情を察知されるような表現になっていたのではないかと述べた。

「第三部 院政期の諸文化と歌学」には清輔以外の六条家歌人について取り上げた。「第一章 藤原顕方 —— 六条家歌人の側面 ——」「第二章 『重家集』考 —— 守覚法親王との関わりを中心に ——」の二論文を収めた。第一章では清輔の同母兄である藤原顕方を取りあげ、彼が和歌に情熱を持たず父からも歌人としては見放されていた可能性を指摘しながらも、初期の詠には盗古歌との関わりを想像させる表現があることに注目した。第二章では従来歴史資料としてみられてきた『重家集』の詞書や表記を見直し、全体が献上者と考えられる守覚法親王への配慮や、自家や後嗣への期待を描く歌集となっていることを論じた。

「第四部 院政期の諸文化と和歌」では、院政期における和歌以外の芸能と、和歌の師弟関係の登場について論じた。「第一章 『今鏡』における源有仁家の描き方 —— 鎖連歌記事とその情報源 ——」と「第二章 和歌の師弟関係の成立 —— 十二世紀における芸能と和歌の地位 ——」の二論文によって、こうした院政期文化の独自の発展が和歌文学の展開にも大きな意味を持つからである。第一章では、鎖連歌の初出例とみられる『今鏡』の源有仁家サロンにおける連歌の記述を追求することで、鎖連歌の文化的位相の解明を目指した。第二章では、和歌の師弟関係の始発として描かれる『袋草紙』の能因と長能との説話が、歌人たちが和歌の師として振る舞う必要にかられた十二世紀の状況、ひいては清輔

の立場が反映されたものであることを論じた。

「第五部 古典文化を検索する」には、「第一章 清原宣賢『詞源略注』『詞源要略』から見る顕昭『後撰集注』の逸文」と「第二章 宮内庁書陵部蔵『類標』をめぐる――近世後期における索引の登場とその思想――」の二論文を収めた。第一章では清原宣賢の『詞源略注』『詞源要略』に散逸したとみられていた顕昭の『後撰集注』の逸文が含まれていることを指摘。しかし、それは抄出であり、完全な一致ではないことを明らかにした。他の『水源抄』なども同様であり、逸文の利用には注意が必要である。第二章では、従来ほとんど知られることがなかった大規模な索引である「類標」について網羅的な悉皆調査を行った。索引というジャンルが近世期の版本の流通を基盤として成立し、様々な近世期の文人たちの協同的な作業を黒河春村が集成したものであることを明らかにした。

### 三 諸本と書写面の関わりについて

このような構成をとった本論文の成果について、諸本論への貢献という立場からまとめておきたい。六条藤家の歌学書、特に清輔と顕昭の著作については、川上新一郎『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九）の文献研究が現在において、最も信頼がおける文献研究の成果として知られている。川上は各地に点在する伝本を一点一点訪書し、複雑を極める伝本の整理を行った。特に清輔本古今集についての網羅的な悉皆調査の業績は不動のものである。『和歌初学抄』や『奥義抄』等の歌学書の伝本についても同様である。しかし、その伝本研究はあくまでも最善本はどれかという点に注力されており、豊富に紹介されている末流伝本についてはほとんど触れられていない。

もちろんそれは一つの立場として有用なものである。しかし、そうした善本主義からでは解き明かせない要素を歌学書は含み持つており、本文上は末流に位置する伝本であっても注意すべき性質をみることができる。第一部第一章「通読する歌学書、検索する歌学書」では鴨長明『無名抄』の諸伝本を取り上げた上で、その書名及び内容的に強く影響を受けている『俊頼髓脳』（俊頼『無名抄』）との書写面の変容の相似的な要素について論じた。そこでは、標目が付け加えられることや、項目自体を移動するといった末流伝本におこりがちな異なる方式を様々な角度から分析することで、伝本は様々であっても書写面の変化のおこりかたには一定のパターンがあることを論証した。このようなパターンを「遷移」と述べたが、書写面のありかたをこのようにとらえた論はなかった。

さらに清輔の『和歌初学抄』はⅠ類本と、Ⅱ類本で項目の立て方が異なる。これはⅠ類本では、各項目は完全に独立しているわけではなく、修辭技法の項目群は全体を読み通すことを目的としている。奈良時代から院政期までのこうした機関にこのような複雑な構想をもつ歌学書はなかった。

### 四 院政期文化と六条藤家について

そうした一方でそもそも院政期に大量の書物が作成されて流通したことが、このような多様性を生み出したことに注意を向けなければならぬ。このような歌学書の大量執筆を促したのは、しばしば指摘されるように貴顕への書物の献上と、それを通じて出世を

訴嘆する院政期の特殊な状況である。とりわけ上皇への奉仕という形で行われた今様を始めとする諸芸能の急激な地位上昇は、芸能の師の地位上昇、管弦を中心とする芸能論書の書面化、和歌における師の登場、秘伝・口説の成立といったそれまでにみられなかった新しい芸能様式の登場に大きく寄与した。和歌もまたそうした流れと無関係ではいられなかった。

清輔の歌学書からはそうした事態に対する強い危機感が伺える。従来はそれを「古代性への回帰」や万葉学への傾倒として受け止める見解が一般的であった。しかし清輔はむしろ『俊頼髓脳』以降の題詠歌の進展を踏まえて、和歌を教える、歌学知を伝授するといった師としての振る舞いが可能な入門書を構想していた。それが『和歌初学抄』である。本書については、第一部第四章、第二部第一章に専論を付した。

『和歌初学抄』の内容的な先進性としては、他の同時代の歌学書にはほとんどみられない「必次詞」と「喩来詞」という項目を備えている。これは現代でいう枕詞と縁語の項目と言って良いだろう。「喩来詞」は「秀句」という同じ縁語の項目と表裏一体の関係にある。「秀句」では月や霧といった物象を、「喩来詞」では「くのこと」という感情や状況から一首に読み込む語句を引き出すことができる。これは同じように歌語の検索を目的としながら、それぞれ異なるアプローチによって目的の語に到達するようにした工夫である。

このような歌学書が成立してくる院政期文化の諸相の中で、重要な役割を持つのが「連歌」である。『今鏡』が示す連歌記述は歌物語的な情趣が求められた。『今鏡』にみえる連歌例のうち、男女が上、下句を詠み交わす場合には『伊勢物語』の場面を想起させるような仕掛けが施されている。『今鏡』における鎖連歌は、こうした短連歌の風情を保ちながら、サロンに集う女房と親しい仲間が風雅な厚誼を交わす文藝として構想されている。源有仁サロンには名のしられた女房が数名おり、和歌の速泳で名前を残す小侍従のような人物が、このような文藝空間を支えていたことが伺える。そうした観点から、越後女房が焦点化されている鎖連歌の記述は、和歌に卓越した女房たちが主人と男性たちを相手にして見事な付句をだした名誉譚であることを論証した。

一方で藤原清輔も「連歌骨法」という連歌論書——おそらくは、『袋草紙』下巻にみえる同名の章と深い関わりがある——を記している。この連歌骨法は、『和歌色葉』の連歌故実に並んで古い段階を示す連歌論記述である。有仁と清輔は二世代ほどの差があるものの、連歌が急激に重要な文藝になっていく院政期の文化的傾向を示しているように思われる。

もう一点重要なのが、先にも少し述べた「和歌の師」という制度である。これもまた院政期における芸能史上、極めて重要な要素である。和歌の師について、袋草紙は次のような説話を載せている。能因の長能への傾倒は、それまでの和歌世界では描かれることのない人物関係を表象している。このような能因と長能との関係は『袋草紙』以前ではクローアップされることがなかった。わざわざこうした和歌の師弟関係の遡及が行われたという一事は、長能のような「師」という存在が清輔にとってどれほど重要であったかを示している。清輔は貴頭に書物を献上し、和歌の師として振る舞うことで身分不相応な歌壇的・社会的な地位を得ていた。それが伺える資料は清輔が卒去するまでの詳細な記録である九条兼実の『玉葉』だろう。また、『袋草紙』や『清輔本古今集』の奥書からわかるように、おそらくは二条天皇に対しても同様の師たる態度をもって接したと思しい。しかしこ

のような「和歌の師」という擬制的な師資相承関係は、自らが師にたる根拠を示し続けなければあえなく別の人物にとつて変わられてしまう儚い関係性だったであろう。だからこそ、教長『古今集注』や顕昭の五代集注釈といった注釈書の体裁をとった始発期古今伝授においては、師が弟子に伝授する灌頂様式を擬似的に再現した伝授の形態をもって、和歌に神秘性を付与させんとしたのである。

鎌倉時代以降には歌道家・歌道師範家の固定化にともない、和歌のみならず連歌でも師の存在は重要なものになっていく。自らを西行の弟子、顕昭の弟子であるという形で流派を誇示するようになるのもほぼ十三世紀の初頭以降の出来事だといってよいだろう。このような和歌の師弟関係が院政期に、その時期に新しく立ち上がった諸制度と共に形成されてきたことの意義は決して小さくないのである。

このような院政期文化に目配りをするとき、和歌の世界で起きてきたことは院政期という時代の刻印と密接に結びれていることが確認できるのである。院政期は和歌が他の諸芸能との厳しい象徴闘争を行った時期だったが、そのような時期に歌学書を大量に作成し、他者の説を否定するといったことには自家だけではなく、和歌全体の権威の上昇が使命として認識されていたに違いない。清輔・顕昭らの大量の執筆活動は、そうした時代の中で和歌がどれほど優れた芸能であるかを証だてようとした試みでもあった。

## 五 索引と抜書

宮内庁書陵部蔵『類標』は、全一七九冊からなる膨大な索引の叢書である。しばしば指摘されるように黒川家に架蔵されていた膨大な「索引」の面影を留める叢書であり、黒河春村が堀直格の援助を受けて収集、制作したものであるらしい。

『類標』は前近代における「内容の調査」がどのようなものであったのかが伺える貴重かつ重要な資料である。『類標』はイロハ・アイウエオ別を中心にしながら、各種内容や事項、人名などが丁数から検出できる。この『類標』が示している検出方法の前提として、近世期以降の版本の大量流通が挙げられる。丁数から検出するという方法は、内容が本ごとによれる写本では不可能である。このような索引が機能する前提として、他人がおなじ本を所有しており、誰もがおなじ索引を使えばおなじ内容にアクセスできるという確信、そして情報環境がなければならぬ。

第五部では、この『類標』という索引、そして歌学書・古注釈書の抜書である清原宣賢『詞源略注』を素材にして、検索や抜書といった書物の性質を考えた。先行する記述を検索するニーズは古くからあったにせよ、物語や和歌作品を含む大量の書物を検索するに当たって、様々な書物にあたる必要に駆られたとき、それをどのようにして探し当てるのかが具体的に伺える点、このような索引類の調査は極めて重要な意味をもっている。

その一方で『詞源略注』のような抜書はしばしば散逸した書物の記述を留めるものとして重視されてきたが、こうした抜書は原書そのものの姿を留めることは少ない。抄出し、よりの確かな形、あるいはより適当な形で書きとどめられるのが普通だろう。それは当たり前のことのようにあるが、宣賢の記述の分析、顕昭『後撰集注』との比較検討からそれが裏付けられたことは重要であると思われる。

## 六 課題と成果

このような研究を通じ、いくつもの課題が残されていることに気づかざるを得ない。

まず、第一部と第二部の課題として、「歌学書以外の書写面の変化」がある。例えば辞書のようなより利用目的が特化された書物では、それはどのように変化していくのだろうか。もちろん稿者は点数の歌学書で得られた成果が膨大な日本古籍全体に適用できるとは考えていない。むしろ、歌学書は極めて特殊なケースであるからこそ、このような変容を被ったのであろう。

そうした状態から、たとえば辞書、あるいは物語、歌集、絵巻物など、他のジャンルではどのような変容を蒙るのか、それは果たしていわゆる「ジャンル」の違いによって明確に出来る問題なのか、時代的な差異変容はどのような要素によって成立するのかといった問題は残されたままである。

しかし、本博士論文から得られた知見を展開していえば、たとえば項目表記や各項目の立項がなされにくい物語では字詰めや一行行数といった以外の要素での変化は比較的すくないだろうし、辞書類であれば紙幅の縮小を求めて可読性よりも字を詰める形を選択する書物があるだろう。このような性質はすでに肥前松平文庫蔵『奥義抄』等に現れている。

しかしながら、本博士論文は従来の多数の六条家研究の業績の上にたち、その上で末流の伝本を含めた諸伝本の群体のありようを描きだし、それらの具体的な検討を通じて古典文学作品の内容や歴史的な事情の分析、書誌学的な分析といった研究方法とは異なるアプローチから、古籍の評価を改める手法を創出した点には小さからぬ意義があると思うのである。